二〇二二年度

入学試験問題

国語

注意

・問題は十四ページにわたって印刷してあります。
・試験時間は五〇分です。
・声を出して読んではいけません。
・作問のため本文にふりがなをつけた部分があります。
・答えは、問題の指示に従って、解答らんの決められた場所に濃(こ)く、はっきりと書きなさい。
・答えをなおすときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
・字数指定のある問いはすべて、句読点・記号も一字と数えるものとします。
・答えはすべて別紙解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。

法学人校 東洋大学

東洋大学京北中学校

1 次の問いに答えなさい。

問一 ぼう線部に相当する漢字を、**ア**～**エ**から一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) その場所に立ち入らないことが不文**リツ**となっていた。
ア 率　**イ** 立　**ウ** 理　**エ** 律

(2) 知り合いの写真家の個**テン**に行く。
ア 展　**イ** 点　**ウ** 典　**エ** 店

(3) 父の実家には土**ゾウ**がある。
ア 蔵　**イ** 象　**ウ** 増　**エ** 造

(4) 犯人が自**キョウ**する。
ア 強　**イ** 経　**ウ** 供　**エ** 協

(5) 友人の**チュウ**告を聞き入れる。
ア 注　**イ** 虫　**ウ** 宙　**エ** 忠

問二 各文に用いられている表現技法として適切なものを、**ア**～**オ**から一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号は一度しか選べないものとします。

(1) あの人は雲のようにつかみどころがない。
(2) 歩き疲(つか)れて足が言うことを聞かない。
(3) ついに解けたんだ、長年の疑問が。
(4) 朝は早起き、夜は早寝(はやね)を心がけている。
(5) 毛布をかぶっても寒気でぞくぞくしてくる。

ア 倒置法(とうちほう)　**イ** 直喩(ちょくゆ)　**ウ** 擬態語(ぎたいご)　**エ** 擬人法(ぎじんほう)　**オ** 対句(ついく)

問三 各文の主語を、①～④から一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) ①この本の　②面白(おもしろ)さを　③私は　④分からない。
(2) ①日光が　②雪の　③散歩道を　④照らす。
(3) ①私にとって　②これが　③最初の　④家族旅行だった。
(4) ①愛の前では　②悪人でさえ　③汚(けが)れない　④子どもに戻(もど)る。
(5) ①彼(かれ)に　②好かれていることが　③分かった、④私でも。

問四　次の対義語を、**ア**～**コ**から一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号は一度しか選べないものとします。

(1)　借用
(2)　容易
(3)　尊重
(4)　実物
(5)　整理

ア　表現　　**イ**　整頓（せいとん）　　**ウ**　無視　　**エ**　理想　　**オ**　困難
カ　模型　　**キ**　借金　　**ク**　返済　　**ケ**　周到（しゅうとう）　　**コ**　散乱

2

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

今、ぼくは、細くて急な登山道を登っている。

どうしてこんなことになってしまったのだろうと、くり返し自問する。

別荘でバカンスだと浮かれていたおめでたい性格や、行きたくないのにずるずると歩きだす優柔不断さが、われながら情けなかった。

道をけとばすように歩いていく。

急におじさんの声がした。

「山とけんかするなよ」

前を歩いているおじさんがふりむきもせずに言った。

「勝ち目はないからな。それに余計に疲れるぞ」

おじさんは、足音だけでぼくの気持ちがわかるのだろうか。①

登山道の土がくつの下でじゃりっと、にごった音をたてた。

「歩いているときには、石を落とさないようにていねいに歩くこと。石を落とすと、あとから登ってくる人や、下山している人に当たったりする。ケガをするリスクがあるんだ。だから、ていねいにな。山でのマナー、その一だ」

おじさんの声が前から聞こえる。

ぼくは思わずおじさんの歩いている先を見た。アスファルトではない、石ころだらけの登山道が続いている。たとえ小さな石だとしても、ころがっているうちに勢いがついてしまうことが想像できる。当たったら痛い。

「うん」

ぼくは、つぶやくように返事をした。

「おはようございます」

突然、声をかけられた。下ばかりむいていた顔をあげると、下山してきた男の人がせまい登山道のわきに立ち止まっていた。明るい笑顔を浮かべてぼくたちに道をゆずってくれている。

「おはようございます」

おじさんが答え、ぼくもそれにならった。

ぼくたちが通りすぎるとその人は登山道にもどり、下山していった。

おじさんは歩調を変えることなく、また話しかけてきた。

「山では、登りが優先なんだ。だから今の人は道をゆずってくれたんだよ。そして、山では、会った人にあいさつする。これが礼儀だ。山でのマナー、その二ってとこかな」

それからは、下山してくる人にあいさつをし続けた。あいさつを返す声が不機嫌じゃないかどうかと気になる。

（イヤイヤ歩いているのに、ぼくは、どうして笑顔を作ったり、他人の目を気にしちゃうん

だろう）

②おなかのそこからため息がでた。

一歩足を前にだすたびに汗がふきだしてくる。息がはずみ、あえぎはじめる。心臓の鼓動がばくばくと音をたてはじめる。走っているわけでも、飛んでいるわけでもなく、ただ、歩いているだけなのに、息が上がってしまう。汗が顔を、体を流れ落ちていく。前を歩くおじさんのザックをにらみつける。あのザックの重さを知らなければ歩きだしたりしなかったのにと、おかど違いの文句を頭の中で並べはじめる。不平不満が頭の中でぐるぐるまわりだした。そして、足元の岩に乗りそこねてよろけた。

（もう、イヤだ！）

そのとき、おじさんが声をあげた。

「よーし、一本だ」

登山道のわきに人が五人ほどすわれそうな草の生えた平らな場所があった。おじさんはそこで立ち止まった。

「休憩だ」

救われた気分になった。広くはない場所だけれど、見晴らしがよかった。ザックをおろして休んでいる人たちがいる。地面からつきでている岩に女の人が腰をおろしている。汗をふき、水を飲んでいる人もいる。ぼくはそっとザックをおろした。

「いいペースだ」

おじさんが満足そうな顔で、首からたらしたタオルで汗をふいた。

「ほれっ、飲むか？」

ザックの中から水の入った容器を渡してくれた。ペットボトルではない。軽く三リットルは入るだろうか。水がいっぱい入ったポリタンクだ。

（ザックの中にこんなに重いものを入れて歩いているんだ）

驚きながら、ぼくはタンクを両手でかかえて、ごくごくと飲んだ。冷たくはないけれど、とてもおいしい。ねばりつく口からのどへと一気に通りすぎていく。そして、おなかにおさまると同時に汗となってふきだす。ほてっている体の熱が汗といっしょに出ていった。

「おいおい、そんなに飲むと、ばてるぞ」

③笑いをふくんだ声だった。

「ほら、見てみろ、あれが車で上って来た道路だ」

おじさんの指さす方を見た。休憩場所のむこう側は木々がまばらな急斜面だった。その木々の間からアスファルトの道がくねくねと見えている。かなり下の方だ。

「木に隠れて見えないけど、あのあたりが登り口だ」

おじさんの人さし指が下をむいていた。おじさんの指の先をのぞきこむようにして斜面に体を乗りだした。そして、すぐに歩いてきた登山道をふりかえった。

「こんなに登って来たんだ」

腹立ちまぎれに進めてきた一歩一歩が、この高度をかせいだのだと思うと不思議な気がする。そして、完全にあきらめた。もう行くしかないのだ。

「食べるか？」

だされたチョコレートを手に取った。熱で変形している板チョコの包装紙を破ってかぶりついた。口に広がる甘さがなんとも言えない。むさぼるように食べる。

「雄太はチョコが好きなのか？」

おじさんがあきれた声をだした。

ぼうっとしかかっていた頭が少ししゃんとした。

あらためて周囲を見まわす。今、ぼくは深い森の中にいた。こんなにたくさんの木々を見たのははじめてのような気がする。休憩場所のわきには白い花をつけた草がゆれている。細く高い声で鳥が気持ちよさそうに歌っている。

「あれはウグイスの鳴き声っていうのは知ってるだろ？　山の中で聞くと、鳴き声が澄んでるな。あのケキョケキョケキョと続けて鳴くのは谷渡りという鳴き方だ。縄張りを宣言しているとか、警戒しているといわれてる鳴き方なんだよ」

ぼくは、鳴き声のする方へ顔をむけた。

木の葉をからかうように風が通りすぎていく。汗が一気に引く。とても心地よい風がぼくの前を通りすぎていった。

「さて、行くかな」

おじさんはゆっくりとザックを背負うと、ぼくを見た。

行くしかないとあきらめたためか、登りになれたせいか、ぐんぐんと足が前にでた。

思いだしたようにスマホを取りだし、イヤホンで音楽を聞きだした。そのリズムに乗って、快調に足を運んでいく。おかげで、痛くなりはじめたふくらはぎや、太ももの筋肉の存在を少し忘れた。

でも、しばらくすると本当にきつくなってきた。おじさんよりずっと軽いはずのザックが肩にくいこみ、とても重く感じられる。イヤホンさえじゃまになった。耳からはずして、ポケットにねじこんだ。

さえぎるもののなくなった耳に、さざ波のような音が飛びこんできた。吹き渡る風が木々の葉をゆらしている音だ。たえ間なくウグイスがさえずっている。川があるのだろうか、水音が下の方から聞こえてくる。木の葉を通して夏の日ざしがもれてくる。ここは、④ぼくが今まで知らなかった世界だ。

前を歩くおじさんの足取りは確かだ。一歩一歩、ていねいに足をだしていく。そのうしろをぼくはついていく。

もう歩けないと思うと、休憩が入る。おじさんは、ついていくぼくの足音だけで疲れがわかるのだろうかと不思議に思う。そして休むと元気になる。そして歩きだす。そのくり返しだ。山では休憩を一本と数えると教えられた。すでに、三本の休憩を取っていた。

重たいザックを背負ったおじさんの歩きはゆっくりだ。ぼくが全力で持ちあげないと上がらなかった重たいザックを背負っているのだから、町の中のようには歩けない。ましてや登りだ。一歩一歩、確認するように、ゆっくりと足を地面に置いていく。その歩幅が、軽いザックを背負ったぼくと同じになる。歩幅だけじゃなく、⑤気持ちまでいっしょになっていく気さえしてくる。おじさんのザックを見つめながら足を運んだ。

（中　略）

流れ落ちる汗と、荒い息をくり返すだけの単調な時間があたりの景色といっしょに過ぎていく。登りはじめたとき、頭の中には不平不満が黒いうずを巻いていた。それなのに、ただ、足をだし、息を整え、登ることにだけエネルギーを集中しているうちに、なぜだか頭の中からいろいろなことがぬけ落ちていった。頭のかたすみから離れることのなかった数学のテストの点数のこと、いまだになじめないクラスメートのこと、からかわれた言葉のトゲのこと。いつも気になる他人の目。今はかっこよく登ろうと外面をとりつくろう余裕など全くない。頭の中でこんがらがっていたそれらのことが、ゆっくりと、そしてするするとほぐれ、消えていく。気がつけば、頭の中はすっからかんだ。

⑥突然、笑いだしそうになった。

理由はわからない。ただ、ほおがゆるんでくる。

（ぼく、何してるんだろうな。必死に足を前にだし、荒い呼吸をしてさ）

脈絡もなく思った。その思いさえ、風に巻きあげられる紙くずみたいに吹き飛ばされていく。頭がからっぽになったせいだろうか、心も軽くなり、澄みきった風が通りすぎていった。

（にしがきようこ『ぼくたちのＰ』小学館）

問一　ぼう線部①「ぼくの気持ち」の説明として適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「おじさん」に別荘でバカンスを一緒に過ごそうと誘われ、断れなかった自分に腹を立てている。

イ　つらい思いをして山を登ることに対して心底嫌気がさし、心が不満でいっぱいになっている。

ウ　舗装されていない、石ころだらけの登山道でケガをしてしまうのではないかと恐怖を感じている。

エ　自分に疲労感をもたらす山に対して敵対心をむき出しにし、山でのマナーを破ろうと決心している。

問二　ぼう線部②「おなかのそこからため息がでた」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　下山してくる人へのあいさつに、わざとではないのに疲れから不機嫌な声が出てしまい後悔の念でいっぱいになっている。

イ　人の好意に対しては感謝の気持ちを伝えたいと思っているのに、素直に表すことのできない自分をもどかしく感じている。

ウ　ただでさえ暑さと荷物の重みでいらだっているのに、「おじさん」から山でのマナーを再三にわたって指導されうんざりしている。

エ　自らすすんで登山を楽しんでいるわけではないのに、人からの視線を意識し笑顔をつくってしまう自分自身にあきれてしまっている。

問三　ぼう線部③「笑いをふくんだ声」とありますが、この場面の「おじさん」の説明として適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「ぼく」の無知さに、怒りを通り越しておかしく思っている。

イ　「ぼく」の子どもらしいふるまいに、とまどいを感じている。

ウ　「ぼく」を気にかけており、愛情をもって接している。

エ　「ぼく」の厚かましい態度に、あっけにとられている。

問四　ぼう線部④「ぼくが今まで知らなかった世界」の説明として適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　極度の疲労によって頭がからっぽになったことでより五感が研ぎ澄まされ、いつもは拒絶反応を示してしまう自然の発するさまざまな音が心地よく感じられる世界。

イ　普段の生活では感じ取ることができなかった、ウグイスが鳴き声によって仲間に発しているメッセージが何なのかが、自然と理解できてしまう不思議な世界。

ウ　自分の意志とは関係なく、周囲から聞こえてくる全ての音がシャットアウトされることで、今まで気づかなかった自分と真に向き合うことが可能となった世界。

エ　他人の視線を気にしながら、自分を取り巻く面倒なことに思いをめぐらす毎日では到底感じることのできなかった、自然そのものがせまってくるような世界。

問五　ぼう線部⑤「気持ちまでいっしょになっていく」とはどういうことですか。その説明として適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「おじさん」と「ぼく」の、目的地に向かってひたすら足を前に出そうという純粋な思いが重なったということ。

イ　これまでいく度となくぶつかってきた「おじさん」の本当の思いを知って、今は素直に従っておこうということ。

ウ　重いザックの「おじさん」と軽いザックの「ぼく」の歩幅が同じになったことで、長年のわだかまりが解けたということ。

エ　「おじさん」と「ぼく」の、もうこれ以上は歩けない、と感じるタイミングがほぼ同時になってきたということ。

問六　ぼう線部⑥「突然、笑いだしそうになった」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　次々に出現する大きな岩を登っていくうちに、どう乗り切っていけばいいのかを自分で考えるよりも、ベテランの「おじさん」のやり方をそのとおりに真似をすればよいと気づいた。

イ　目の前の山に登ることに必死になるあまり、これまで頭の中を占めていた、気を張って過ごす日常のわずらわしさや山を登り始めたときの不平不満が姿を消し、どうでもいい問題に思えた。

ウ　山に登り始める前はつらいことから目を背けようとしていた自分が、今は困難な状況を自分から積極的に選び取って求めていることを、自分より先に「おじさん」に気づかれてしまった。

エ　山を登る前に立てていた、クラスの皆を見返すために大きなことをやりとげる、という目標がいよいよ達成目前にせまってきたことを意識し、うれしい気持ちでいっぱいになった。

3

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

見えない人が「見て」いる空間と、見える人が目でとらえている空間。それがどのように違うのかは、一緒に時間を過ごす中で、ふとした瞬間に明らかになるものです。

たとえば、先ほども登場していただいた木下路徳さんと一緒に歩いているとき。その日、私と木下さんは私の勤務先である東京工業大学大岡山キャンパスの私の研究室でインタビューを行うことになっていました。

私と木下さんはまず大岡山駅の改札で待ち合わせて、交差点をわたってすぐの大学正門を抜け、私の研究室がある西9号館に向かって歩きはじめました。その途中、一五メートルほどの緩やかな坂道を下っていたときです。木下さんが言いました。「大岡山はやっぱり山で、いまその斜面をおりているんですね」。

私はそれを聞いて、かなりびっくりしてしまいました。なぜなら木下さんが、そこを「山の斜面」だと言ったからです。毎日のようにそこを行き来していましたが、私にとってはそれはただの「坂道」でしかありませんでした。

つまり私にとってそれは、大岡山駅という「出発点」と、西9号館という「目的地」をつなぐ道順の一部でしかなく、曲がってしまえばもう忘れてしまうような、空間的にも意味的にも他の空間や道から分節化された[*1]「部分」でしかなかった。それに対して木下さんが口にしたのは、もっと俯瞰的で空間全体をとらえるイメージでした。

確かに言われてみれば、木下さんの言う通り、大岡山の南半分は駅の改札を「頂上」とするお椀をふせたような地形をしており、西9号館はその「ふもと」に位置しています。その頂上からふもとに向かう斜面を、私たちは下っていました。

けれども、見える人にとって、そのような俯瞰的で三次元的なイメージを持つことはきわめて難しいことです。坂道の両側には、サークル勧誘の立て看板が立ち並んでいます。学校だから、知った顔とすれ違うかもしれません。前方には混雑した学食の入り口が見えます。目に飛び込んでくるさまざまな情報が、見える人の意識を奪っていくのです。あるいはそれらをすべてシャットアウトしてスマホの画面に視線を落とすか。そこを通る通行人には、自分がどんな地形のどのあたりを歩いているかなんて、想像する余裕はありません。

そう、私たちはまさに「通行人」なのだとそのとき思いました。「通るべき場所」として定められ、方向性を持つ「道」に、いわばベルトコンベアのように運ばれている存在。それに比べて、まるでスキーヤーのように広い平面の上に自分で線を引く木下さんのイメージは、より開放的なものに思えます。

物理的には同じ場所に立っていたのだとしても、その場所に与える意味次第では全く異なる経験をしていることになる。それが、木下さんの一言が私に与えた驚きでした。人は、物理的な空間を歩きながら、実は脳内に作り上げたイメージの中を歩いている。私と木下さんは、同じ坂を並んで下りながら、実は①全く違う世界を歩いていたわけです。

彼らは「道」から自由だと言えるのかもしれません。道は、人が進むべき方向を示します。もちろん視覚障害者だって、個人差はあるとしても、音の反響や白杖[*2]の感触を利用して道の幅や向きを把握しています。しかし、目が道のずっと先まで一瞬にして見通すことができるのに対し、音や感触で把握できる範囲は限定されている。道から自由であるとは、予測が立ちにくいという意味では特殊な慎重さを要しますが、だからこそ、道だけを特別視しない俯瞰的なビジョンを持つことができたのでしょう。

全盲の木下さんがそのとき手にしていた「情報」は、私に比べればきわめて少ないものでした。少ないどころか、たぶん二つの情報しかなかったはずです。つまり「［X］」と「［Y］」の二つです。しかし情報が少ないからこそ、それを解釈することによって、見える人では持ち得ないような空間が、頭の中に作り出されました。

木下さんはそのことについてこう語っています。「たぶん脳の中にはスペースがありますよね。見える人だと、そこがスーパーや通る人だとかで埋まっているんだけど、ぼくらの場合はそこが空いていて、見える人のようには使っていない。でもそのスペースを何とか使おうとして、情報と情報を結びつけていくので、そういったイメージができてくるんでしょうね。さっきなら、足で感じる『斜面を下っている』という情報しかないので、これはどういうことだ？　と考えていくわけです。だから、見えない人はある意味で余裕があるのかもしれないね。見えると、坂だ、ということで気が奪われちゃうんでしょうね。きっと、まわりの風景、空が青いだとか、スカイツリーが見えるとか、そういうので忙しいわけだよね」。

まさに情報の少なさが特有の意味を生み出している実例です。都市で生活していると、目がとらえる情報の多くは、人工的なものです。大型スクリーンに映し出されるアイドルの顔、新商品を宣伝する看板、電車の中吊り広告……。見られるために設えられたもの、本当は自分にはあまり関係のない＝「意味」を持たないかもしれない、純粋な「情報」もたくさんあふれています。視覚的な注意をさらっていくめまぐるしい情報の洪水。確かに見える人の頭の中には、木下さんの言う「脳の中のスペース」がほとんどありません。

それに比べて見えない人は、②こうした洪水とは無縁です。もちろん音や匂いも都市には氾濫していますが、それでも木下さんに言わせれば「脳の中に余裕がある」。さきほど、見えない人は道から自由なのではないか、と述べました。この「道」は、物理的な道、つまりコンクリートや土を固めて作られた文字通りの道であると同時に、③比喩的な道でもあります。つまり、「こっちにおいで」と人の進むべき方向を示すもの、という意味です。

人は自分の行動を一〇〇パーセント自発的に、自分の意志で行っているわけではありません。知らず知らずのうちにまわりの環境に影響されながら行動していることが案外多いものです。

「寄りかかって休む」という行為ひとつとっても、たいていは寄りかかろうと思って壁を探すのではなくて、そこに壁があるから寄っかかってしまう。子どもの場合は特にその割合が高くなります。「いたずら」とはたいていそうしたものです。ボタンがあるから押したくな

るし、台があるからよじ登ってしまう。環境に埋め込まれたさまざまなスイッチがトリガーになって、子どもたちの行動が誘発[*3]されていきます。

いわば、人は多かれ少なかれ環境に振り付けられながら行動している、と言えるのではないでしょうか。

あるトリガーから別のトリガーへとめまぐるしく注意を奪われながら、人は環境の中を動かされていきます。人の進むべき方向を示す「道」とは、「こっちに来なさい、こっちに来てこうしなさい」と、行為を次々と導いていく環境の中に引かれた導線です。

たとえば京都の桂離宮[*4]に行くと、その場所でどこを見るべきかというまなざしの行方までもが計算されていることに気づきます。人の行動をいざなう「道」が随所に仕掛けられているわけです。実際に訪れてみて、桂離宮というのはまるで舞踏譜[*5]のようだなとしきりに感心しました。

桂離宮ではひとつの道が明瞭に引かれていますが、都市においては無数の道が縦横無尽に引かれています。しかもその多くは、人の欲望に強く訴えてくる。真夏のかんかん照りの道にコーラの看板があれば飲みたくなってしまうし、「本日三割引き」ののぼりを見ればついスーパーに入って余計な買い物をしてしまう。その欲望がもともと私の中にあったかどうかは問題ではありません。視覚的な刺激によって人の中に欲望がつくられていき、気がつけば「そのような欲望を抱えた人」になっています。

資本主義システムが過剰な視覚刺激を原動力にして回っていることは言うまでもないでしょう。それを否定するのは簡単ではないしするつもりはありませんが、都市において、私たちがこの振り付け装置に踊らされがちなのは事実です。最近ではむしろ、パソコンのデスクトップやスマートフォンの画面上に、こうしたトリガーは増殖しているかもしれません。仕事をするつもりでパソコンを開いたら買い物をしていた……よくあることです。④私たちは日々、軽い記憶喪失に見舞われています。いったい、私が情報を使っているのか、情報が私を使っているのか分かりません。

（伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社）

※問題の作成上、文章の一部を省略している。

＊1　俯瞰…高いところから広い範囲を見おろしながめること。
＊2　白杖…視覚障害者が使用する白いつえ。
＊3　誘発…あることが原因となって、他の事をひき起こすこと。
＊4　桂離宮…京都にある離宮。
＊5　舞踏譜…ダンスの振り付けが記されているもの。

問一　ぼう線部①「全く違う世界を歩いていた」とありますが、同じ場所を歩いていながらなぜそのように筆者は述べているのですか。その説明として適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人によって興味関心を抱(いだ)く対象が異なっているため、気になるものだけを意識しイメージしているから。

イ　同じ道を歩いたとしても人によって歩き方が異なるため、違う道のようにイメージしてしまうから。

ウ　実際の空間を歩いていたとしても、それぞれの頭の中で作り上げたイメージで空間を認識(にんしき)しているから。

エ　その環境をこれまでに何回歩いたかによって印象が変わるため、意識する部分が異なってしまうから。

問二　空らん［**X**］・［**Y**］にあてはまることばの組み合わせとして適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　**X**　音の反響　　**Y**　白杖の感触
イ　**X**　大岡山という地名　　**Y**　足で感じる傾き
ウ　**X**　脳内のイメージ　　**Y**　道
エ　**X**　お椀のような地形　　**Y**　ふもとにある学校

問三　ぼう線部②「こうした洪水」とありますが、このことばの説明として適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　見る人に影響を与えかねないような多量の視覚的情報
イ　見る人の脳内で次々に作られる多様な想像的情報
ウ　見る人の中で生み出され続ける新たな商品を知らせる人工的情報
エ　見る人が手や肌(はだ)で感じることができる無限の空間的情報

問四　ぼう線部③「比喩的な道」とありますが、このことばを説明している本文中の部分として適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　方向性を持つ「道」に、いわばベルトコンベアのように運ばれている存在
イ　コンクリートや土を固めて作られた文字通りの道
ウ　行為を次々に導いていく環境の中に引かれた導線
エ　資本主義システムが過剰な視覚刺激を原動力にして回っていること

問五　ぼう線部④「私たちは日々、軽い記憶喪失に見舞われています」とありますが、この例として適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　飛行機で九州に行こうと考えていたが、天気が悪いので行き先を四国に変えた。

イ　家に帰ったら宿題をしようと考えていたが、学校にノートを忘れて宿題ができなかった。

ウ　五年前の家族旅行の写真を見て、忘れてしまっていた楽しかったことを思い出した。

エ　鶏肉（とりにく）を買おうとスーパーに行ったが、特売の看板を見て思わず牛肉を買ってしまった。

問六　本文の内容として**適切ではないもの**を、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　目が見える人は、ずっと先まで見通すことができないが、空間を三次元でとらえられる。

イ　目が不自由な人は、少ない情報を結びつけることによって物事を理解しようとする。

ウ　「トリガー」とは、人の行動を引き出すきっかけのようなものである。

エ　桂離宮には、人がどこを見るようになるか、どのように移動するかといった仕掛けがある。

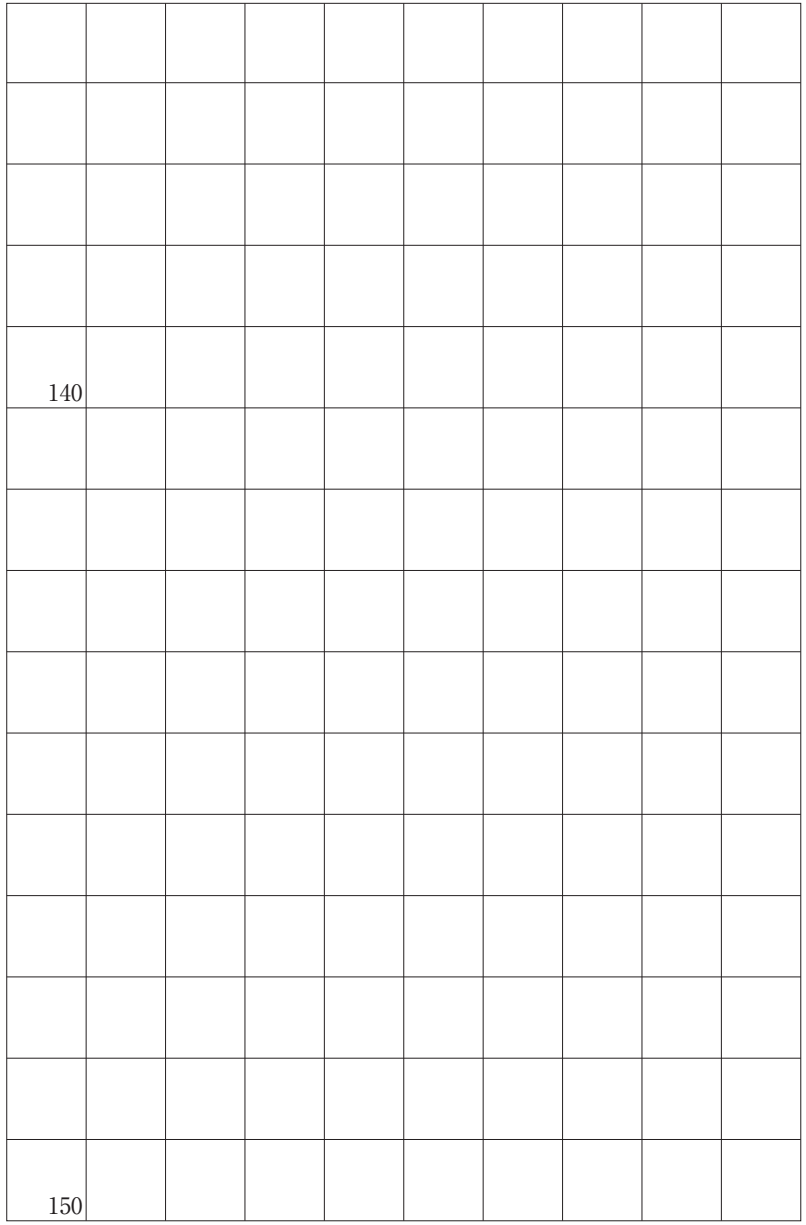
4 次の問いに答えなさい。

問 「自分を好きになろう」という考え方がありますが、あなたは自分を好きになることは重要だと考えますか。理由をふくめて**一四〇字以上、一五〇字以内**であなたの考えを書きなさい。

注意事項

・解答らんの一マス目から書きなさい。
・句読点や記号も一字とし、一番上のマスに入ってもよいものとします。
・漢字で書けるものは、漢字で書くようにしなさい。
・書きことばで書きなさい。

【下書き】



2022—J—①

二〇二二年度　中学入試　第一回　**国語**　解答用紙

東洋大学京北中学校

受番	験号

氏名

1

問一	問二	問三	問四
(1)	(1)	(1)	(1)
(2)	(2)	(2)	(2)
(3)	(3)	(3)	(3)
(4)	(4)	(4)	(4)
(5)	(5)	(5)	(5)

合計

2

問一	問二	問三	問四	問五	問六

3

問一	問二	問三	問四	問五	問六

4

150

140

1	2	3	4

2022—J—①

二〇二二年度　中学入試　第一回　国語　解答用紙

東洋大学京北中学校

受験番号	氏名

1

問一	問二	問三	問四
(1) エ	(1) イ	(1) 3	(1) ク
(2) ア	(2) エ	(2) イ	(2) オ
(3) ア	(3) ア	(3) 2	(3) ウ
(4) ウ	(4) オ	(4) 2	(4) カ
(5) エ	(5) ウ	(5) 4	(5) コ

各1点

1 20

合計

2

問一	問二	問三	問四	問五	問六
イ	エ	ウ	エ	ア	イ

各5点

2 30

3

問一	問二	問三	問四	問五	問六
ウ	イ	ア	ウ	エ	ア

各5点

3 30

4

設問の特性上、解答例なし

4 20